

Institute for Language Education  
Aichi University, Nagoya  
**Goken News**  
No. 16 December 2006



船上からのブレッド湖：スロベニア共和国  
湖の汚染を防ぐため、エンジンのついた乗り物は禁止。  
12人乗りの手漕ぎボートで優雅に水面を渡る。

CONTENTS

- |   |                                       |
|---|---------------------------------------|
| ・ハスに託した恋心<br>（矢田 博士）.....2                          | ・コラム 韓国雑学：ことばと文化の散策<br>（古里 亜星）.....16 |
| ・試験に絶対出ない英単語<br>（安藤 聡）.....3                        | 海外最新事情 .....19                        |
| ・電子辞書の使い方<br>（田川 光照）.....7                          | ・イギリス                                 |
| ・2人の老人、中国周遊<br>（賈 保華）.....9                         | ・フランス                                 |
| ・英国の方言<br>リヴァプール編<br>（安藤 聡）.....11                  | ・スロベニア                                |
| ・ギリシア・ローマ神話と現代（2）<br>新惑星エリスの名前の由来<br>（山田 晶子）.....15 | ・中国                                   |
|   | ・韓国                                   |

## ハスに託した恋心

経営学部  
矢田 博士

ハスは、夏に美しい花を咲かせるばかりか、秋にはその根や実（種子）が食用にもなるため、中国では古来、身近な植物として人々に親しまれてきた。とりわけ水郷地帯で知られる江南地方の池や湖では、必ずといってよいほど水面に浮かぶその姿を目にすることができる。

ハスは部位によって様々な呼び名があり、中国最古の字書とされる『爾雅』巻八「釈草」篇に、以下のように言う。なお、[ ] 中の記述は、東晋時代の郭璞という人が付けた注釈である。

荷、芙渠 [別名芙蓉、江東呼荷]。其莖茄、其葉蓮、其本密 [莖下白藕在泥中者]、其華菡萏、其實蓮 [蓮謂房也]、其根藕、其中的 [蓮中子也]、的中薏。

《荷は、芙渠 [別名を芙蓉といい、江東地方では荷と呼んでいる] のこと。その莖を茄、その葉を蓮、その莖の根本の部分に密 [莖の下の方の泥の中にある白い根茎のこと]、その花を菡萏、その果托を蓮 [蓮は種子を収める房状の果托をいう]、その根を藕、果托の中にある種子を的 [蓮の中にある種子のこと]、種子の中心にある胚芽を薏と、それぞれ言う。》

ではここで、ハスを詠った詩を一首、紹介しよう。

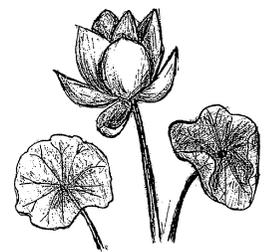
青荷蓋緑水	青荷 緑水を蓋い
芙蓉披紅鮮	芙蓉 紅を披いて鮮やかなり
下有並根藕	下には根を並ぶるの藕有り
上生並目蓮	上には目を並ぶるの蓮を生ず

この詩は、南朝の宋から南齊の頃にかけて、江陵（湖北省荊沙市）を中心とする長江の中流域、および襄陽（湖北省襄樊市）を中心とする漢水の上流域で流行した「西曲歌」と呼ばれる民間歌謡の一つで、「青陽度」という題で今日に伝わる。これらの都市は、水上交通の要衝の地であったことから、南朝の頃から商業都市として発達し、また歓楽街として知られるようになった。街には多くの妓楼が軒を連ね、商人たちが盛んに利用したという。「西曲歌」には、男女の恋愛をテーマとしたものが多い。おそらくそれは、訪れてはすぐ去っていく、つれない商人を相手にする妓女たちによって歌われたものが多く含まれているからであろう。ここに挙げた「青陽度」は、五言四句からなる古詩で、偶数句末の「鮮 (xiān)」と「蓮 (lián)」とで押韻する。

青々としたハスの葉が  
緑色の水面を覆い、  
淡紅色に咲くその花が  
目に鮮やかに映し出される。

前半の二句は、目の前に広がる実景、ここでは水面に浮かぶハスの姿を描く。荷の葉の「青」、水の「緑」、芙蓉の花の「紅」といった色彩語の多用は、読者の視覚的イ

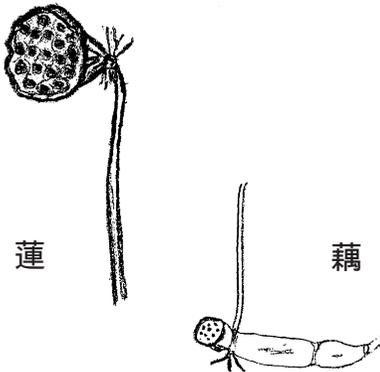
メージをふくらませる上で効果的であろう。ハスの葉の青色と水の緑色とが背景にあるからこそ、淡紅色であっても花が際立って目に鮮やかに映るのである。極めて絵画性に富んだ句であると言える。



水の下にはハスネが二つ、  
 仲良く並んでふくらみを増し、  
 水の上にはハチスが二つ、  
 左右の目のように並び立つ。

後半の二句は、眼前の実景としてではなく、これから先のハスの生長過程を想像したものと捉えるべきであろう。「並」という同じ漢字が使用されている点に、やや素朴さを感じさせるものの、比較的きれいな対句を構成している。「藕」は、ハスの根のレンコンとなる部分をいう。「蓮」は、花が枯れた後にできる、多くの実（種子）をたくわえるための果托をいう。その形状が蜂の巣に似ていることから、ハチスとも呼ばれる。

夏に色鮮やかに咲き人々の目を楽しませていた花も、やがては枯れてしまうが、その代わりに秋になれば「蓮（果托）」には多くの実（種子）となり、根の先端はふくらんで「藕（レンコン）」となる。今度は実（種子）と根とが食用として人々の舌を楽しませることになるのである。



さて、「青陽度」という詩について、ひとまずは以上のように解釈してみたが、この詩の解釈をここで終わらせてしまったのでは、この詩の面白みは半減してしまうであろう。

実はこの詩には、後半の二句に、ある仕掛けが施されているのである。前半の二句が色彩語の多用によって視覚面に訴える効果をねらったものだとすれば、後半の二句はそこに施された仕掛けによって聴覚面での効果をねらったものだとと言えるであろう。

では、どのような仕掛けが施されているのか。種を明かすと、三句目の句末の「藕（ǒu）」の字が同音の「偶（ǒu）」の字を連想させ、同様に四句目の句末の「蓮（lián）」の字が同音の「隣（lián）」の字を連想させる、といった仕掛けが施されていたのである。いわゆる「掛け詞」に似た修辞技法で、中国ではこれを「双関語」と呼んでいる。

「偶」は、「つれあい、配偶者」の意。「隣」は、「愛しむ」の意。つまり、後半の二句には、「たとい盛り時期が過ぎたとしても、いつまでも夫婦として寄り添って愛しみあいたい」といった、おそらくは女性の恋心が託されていたのであり、この詩もやはり男女の情愛をテーマとしていたのである。

## 試験に絶対出ない英単語

経営学部  
 安藤 聡

・chad: 「紙に穴を開けたときに残る丸い屑。」こんなものにまで名前があったという事実に感動を禁じ得ない。ちなみにこの単語は『プログレッシブ英和辞典』（小学館）にも掲載されているが、定義は「チャド、(パンチカードの)さん孔くず」となっている。「さん孔」は正しく書けば「鑽孔」であり、『新明解国語事典』（三省堂）によれば「堅い岩、鉄などに穴をあけること。[広義では、紙のテープに穴をあけることや、パンチカードにパンチを入れることをも指す。]」である。だからchadを強いて日本語で言えば「鑽孔屑」ということになるが、口頭で言ってもおそらく通じないであろう。

・ **phosphene**: 「目をこすったときに見える光の粒。」これも一応、『プログレッシブ』に載っている。発音は綴り通りで、強いてカタカナで書けば「フォスフィン」である。「光視、眼内閃」という訳語が与えられている。試験にも絶対に出されないであろうが、日常会話でもまず使わない単語だ。

・ **lunula**: 「爪の根本の白い部分。」これも『プログレッシブ』にエントリーされている。発音は綴り通り「ルーニュラー」で、「ルー」に強勢が置かれる。語義は「新月[三日月]形のもの；小づめ・半月紋様など」とあり、「爪の白い部分」とは限らないようだが、この部分は確かに三日月の形をしている。ラテン語で「月」を意味する 'luna' の派生語であることは言うまでもない。ちなみにおなじく 'luna' からの派生語である 'lunatic' は名詞で「狂人、精神異常者」、形容詞で「狂気の、常軌を逸した」の意味だが、原義は「月に影響された」である。古来から月は人間の理性を左右すると信じられてきた。狼男が満月の夜に狼に変身することも、このことと無関係ではない。ついでながら、「三日月」は英語で 'crescent'、フランス語で 'croissant' (クロワッサン) である。

・ **beefalo**: 「牛と水牛の合いの子。」これは『プログレッシブ』にはない。『リーダーズ英和辞典』(研究社)にはある。「【畜】ビーファロー《野牛と畜牛との雑種の肉牛》」だそう。ちなみに『リーダーズ』には 'cockapoo' という語もあり、これは「コッカースパニエルとプードルの雑種」である。翻訳家の岸本佐知子さん(ニコルソン・ベイカーの翻訳で有名)は仕事で『リーダーズ』を引いているときに、この単語がやたら目につくのだそう(詳しくはエッセイ集「気になる部分」を読みたい)。関係ないがジャガイモとトマトを掛け合わせた「ポマト」という野菜があるらしい。友人某はこれを、別に「トテト」でもいいではないか、と言っていた。また、私が中学生だった頃、テレビで「右に回すとボールペン、左に回すとシャープペンシル、<シャーボ>と呼んで下さい」と宣伝されていた筆記具があった。その頃、それ以前からあった「一方に回すと黒ボールペン、

もう一方に回すと赤ボールペン」という筆記具は、私の友人の間では「ボーボ」と呼ばれていた。

・ **blype**: 「日焼けした後で剥け落ちる皮。」『プログレッシブ』にも『リーダーズ』にも載っていない。『Oxford English Dictionary』では語源不詳ということになっていて、用例として1878年に発表されたロバート・バーンス(1759~96。スコットランドの国民的詩人。日本では「螢の光」とか「麦畑」で知られている)の「ハロウィーン」という詩の一節が挙げられているだけだ。小学校時代の夏休みなどに、急激に陽に焼けてその炎症が治まった頃、試しに皮を剥がしてみたら巨大な blype が取れて、嬉しくなってしばらく保存しておいたりしたことがあるのはきっと私だけではないはずだ。

・ **lethologica**: 「ある単語がどうしても思い出せない症状。」これは『OED』にさえ載っていない。医学英語辞典を当たらないとだめなのかも知れない。外国語に限らず、母国語でもある特定の単語をどうしても思い出せないということはよくあるが、近い将来 'lethologica' という単語をどうしても思い出せなくなりそうな予感がする。

・ **transurphobia**: 「散髪恐怖症。」これも『OED』になかった。似たような意味で 'tonsurphobia' というのも見たことがあるが、こちらは「剃髪恐怖症」。散髪を恐れる理由というのが、刃物を持った他人に至近距離で自分の頭部をいじられることに対する恐怖なのか、変な髪型にされてしまうことに対する恐怖なのかは不明である。

・ **trilemma**: 「三つの立場の間での板挟み。」ここで 'dilemma' という単語を連想できれば話は簡単である。これは日本語で言う「ジレンマ」、つまり「二つの立場の間での板挟み」だ。語源はラテン語の 'di' (二重の) と 'lemma' (仮定) である。この 'di' が 'tri' になったのが 'trilemma' である。接頭辞 'tri' は「三」を表し、例えば「三角形」は 'triangle'、「三輪車」は 'tricycle'、「三カ国語話者」は 'trilingual'、「三脚」は 'tripod'。

・ **titlle**: 「小文字 'i' の点。」ちなみに私は今、小文字 'i' の横棒を英語で何と呼ぶか、どうしても

思い出せない。まさに lethologica である。

・ **vexillology**: 「旗に関する研究。」`vexillum` は古代ローマの「軍旗」であり、vexillology には『リーダーズ』では「旗学」という訳語を与えている。だが、「旗学部」や「旗学科」がある大学というのも見たことがないし、旗学者に会ったこともなければ、日本旗学会とか国際旗学会というのも聞いたことがない。

・ **queuetopia**: 「何をかうにも長蛇の列に並ばなければならぬ共産主義国。」ウィンストン・チャーチル (1874~1965。英国の政治家) の造語。これはもちろん `utopia` という語が基になっている。「ユートピア」はサー・トマス・モア (?1477~1535) の造語で、架空の理想国の名称。もっともモアの『ユートピア』(中公文庫) を読んで、その世界が「理想的」だとはあまり思えないのだが。ユートピアの語源はギリシア語で `ou` (ない) と `topos` (場所) に名詞語尾 `ia` がついて、「存在しない場所」の意味だが、音声的には同時に「よい (eu) 場所」の意味をも伝えている。いずれにせよ、理想的な国というのは存在しないのである。ちなみにサミュエル・バトラーの小説『エレホン』に描かれる理想国エレホン (Erehwon) もまた、`nowhere` を逆から綴ったものであり、ユートピアと同様「存在しない場所」ということである。一方で `queue` という単語は英国以外ではあまり使われていないようだ。英国では常識以前の日常基本語なのだが、これを知らなかった英語教師が日本に少なくとも三人いる。これは「キュー」と発音し、動詞で「並ぶ」、名詞で「列」である。

・ **ideolocator**: 「地図上の現在地を示す印。」日本ではこういう場合、たいてい赤い矢印か三角印で「現在地」と書かれているが、英語圏では `You are here` と書かれている場合が多い。

・ **penultimate**: 「最後から二番目の。」ちなみに最後から三番目は antipenultimate。ただし日常会話で「最後から二番目の ~」と言いたいときにはこのような面倒な単語を使う必要はなく、`the last ~ but one` と言えばよい。

・ **hemidemisemiquaver**: 「六十四分音符。」こんな

音符が頻出する曲をピアノで弾けと言われたら嫌だ。語幹となる `quaver` が「八分音符」であり、それを半分にした `semiquaver` が当然「十六分音符」である。ちなみに「一週間に一回」を英語で言うと `weekly` だが、その半分の頻度「二週間に一回」は `semiweekly`、「半円」は `semicircle`、「準決勝」は `semifinal` だ。それでその「十六分音符」をさらに半分にした「三十二分音符」を `demisemiquaver` と言う。この接頭辞 `demi` もまた `semi` と同様「半分の」を意味し、通常の半分くらいの大きさの珈琲カップが `demitasse` (デミタス)、「半回転」が `demivolt`、「半神」は `demigod` である。そして、`hemi` もまた「半分の」を意味する接頭辞であり、例えば「北半球」とか「南半球」とか言うときの「半球」は `hemisphere`、「半地中植物」は `hemicryptophyte`。

・ **groaking**: 「人が何かを食べているときに、少しくれないかなあと思っていると見つめること。」これと同じ意味の日本語の単語は (多分) ない。ないということは、このような行為が、日本においてよりも英語圏諸国においてより頻繁に行われているということであろう。あるいは日本でも同じくらい行われるにもかかわらず、されている側が気付かなかったり故意に黙殺したりして、あまり認知されないということなのかも知れない。

・ **taphephobia**: 「生き埋めになること、生きたまま埋葬されることに対する恐怖。」語尾の `phobia` は「恐怖症」を表し、例えば「高所恐怖症」は `acrophobia`、「閉所恐怖症」は `claustrophobia` である。他にも、

・ **telephonobhobia**: 「電話恐怖症。」などというのがある。

・ **hydrodaktulpsychicharmonica**: 「硝子製楽器の一種。」日本語で何と呼ぶかは不明。最後の9文字は「ハーモニカ」である。最初の `hydro` は「水」を意味する (`hydrogen` は「水素」、`dehydrate` は「脱水する」)。少しずつ大きさの異なるグラスを重ねて横向きにして、中心に軸棒を通して固定し、それを回転させ水で濡らしながら手で擦って音を出す楽器で、ベンジャミン・フランクリン (1706

～90。米国の政治家・著述家・発明家)の発明品だそう。

・**deltiologist**:「絵葉書蒐集家。」当然のことながら 'deltiology' は「絵葉書蒐集」を意味する。私は別に deltiologist ではないのだが、私の手許には夥しい数の絵葉書がある。観光地や美術館などでいつも多めに買ってしまふので、知らないうちに集まってしまったのだ。

・**bromhidrosis**:「臭気を放つ汗。」語頭の 'brom' は「臭素」、それに続く 'hidro' は「水」である。ちなみに、人間の汗に臭気はない。皮膚の表面のバクテリアによって臭いが発生するのである。なお、日本語で「汗」と言うと、文脈によっては「青春のシンボル」的な爽やかなイメージになるが、英語の 'sweat' はあまり人前で発話しない方がいいようなイメージの単語であるということに留意しておく必要がある。私が知る限り「ポカリスエット」は英語圏諸国では発売されていない。

・**buccula**:「二重顎。」英国では全国民の6割以上が肥満であり(しかもこの割合は年々増加している)、当然二重顎の人も多い。だがこんなややこしい単語が使われることは滅多になく、通常は 'double chin' と言う。

・**archibutyrophobia**:「ピーナッツバターが硬口蓋(口の中の上の部分)に付着することに対する恐怖症。」語頭の 'arch' は「一番上の」の意味で、例えば天使の中で一番地位が高いのが 'archangel'、同様に主教で一番偉いのが 'archbishop' だ。そして 'butyro' が「バター」である。「ピーナッツ」はどこにもない。したがって 'archibutyrophobia' が何故「<ピーナッツバターが>硬口蓋に付着することに対する恐怖症」の意味になるのかは不明。ちなみに英国には、「バターじゃないなんて信じられない」(I Can't Believe It's Not Butter)という商標名のマーガリンがある。

・**gymnophobia**:「裸体恐怖症。」ギリシア語で 'gymno' は「裸体の」の意味。エリック・サティ(1866～1925)のピアノ曲「ジムノペディ」は「裸の子供」ということだ。古代ギリシアには「ジムノペディア」という祭があって、これはア

ポロンやパッカスを讃えて全裸で踊り狂う祭だそう。体育館、屋内競技場を意味する 'gymnasium' も原義は「裸で訓練をする公共の場所」という意味である。古代ギリシアでは運動競技はたいてい全裸で行われていたのである。というわけで gymnophobia だが、これは「裸体を見ることに対する病的な恐怖感」と定義されている。こういう症状を持つ人が、芸術作品や広告などにおける裸体描写に異を唱えて騒いだりするのだろうか。一方で、

・**dishabiliophobia**:「人前で衣服を脱ぐことに対する恐怖症。」というもある。今度は裸体を見ることではなく見られることに対する病的な恐怖である。もちろん、まともな文明人なら特定のシチュエーション(温泉の脱衣所とか)以外において人前で衣服を脱ぐことには多少なりとも抵抗があるだろうが、その抵抗感が尋常でなく、恐怖というレベルにまで行ってしまうのが dishabiliophobia なのである。語頭の 'dis' が「否定、分離、剥奪」を表すことは想像に難くないし(sportの語源は disport、つまり「離して」「運ぶ」ということであり、要するに「本来の状態(仕事場とか家庭とか)から離れたところへ自身を運ぶ」ということである)、'habilio'の部分は例えば 'habilitment'(古い用法で「服飾品、衣服」、現在は「備品、設備」という単語を連想すればよい)。

・**cheriphobia**:「笑い死にすることに対する恐怖症。」笑いすぎて死んだ人というのは真間にしてまだ知らないが、笑い過ぎて嘔吐した奴なら私の友人の中に少なくとも一人いる。幸い私はその現場にいなかったが。

・**carnophobia**:「肉恐怖症。」語頭の carno が「肉」に関係する。例えば carnival の原義は「肉を取り上げること」で、復活祭の前の40日間に肉食を絶つ前に心おきなく肉類を食す祭のことだ。また carnivorous といえは「肉食性の」という意味であり、一方で carnation は「人肉食」が元来の意味である。英国では復活祭の40日前の水曜日(Ash Wednesday という)の前日の火曜日(Shrove Tuesday、通称 Pancake Tuesday)に、巨大なパ

ンケーキに肉類を初めとする消費すべき食材をすべて投入して焼くという習慣があった。今でもバッキンガムシャー州のオルニーという町では、地元の主婦がフライパンにパンケーキを入れて空中に投げつけてはまたそのフライパンで受け止めつつ走って順位を競うという 'Pancake Race' が毎年この日に行われている。

・fey: 「死にかけている人が、何事もないかのように起き上がって談笑している状態。」これはジョーディ (Geordie)、つまりニューカースル・アボン・タインおよびその周辺 (イングランド北東部) の方言である。『リーダーズ』には「異常にはしゃいだ、高ぶった《昔死の前兆とされた》; 頭の変な、気がふれた; 第六感のある、千里眼の; この世のものでない、異様な; 魔力をもった、妖精のような; 《スコ》死ぬ運命の、死にかけている。」とある。ジョーディ用法には言及していない。最後の「死ぬ運命の」は現在ではスコットランド方言だが、ルネサンス時代のイングランドを代表する詩人のひとりエドマンド・スペンサー (?1552~99) はこの語をこの意味でたびたび用いている。それにしても、ニューカースルあたりでは死にかけている人が起き上がって談笑するということがよくあるのだろうか。それが気になったので、ニューカースル大学に留学していた友人に頼んで、彼の地に生まれ育った人にこのことについて訊いてもらった。すると、そのニューカースルの人は、'fey' という単語を「死ぬ運命の」と「狂ったように興奮して」という意味でのみ知っていた、とのことである。私がある本で見つけた「死にかけている人が、何事もないかのように起き上がって談笑している状態」という情報が間違っているのか、あるいはジョーディといってもある程度広い範囲の方言なので (タイン川流域全体を含む)、ニューカースル境界以外の地域での用法なのか、今後調査を続行したいと思う。

## 電子辞書の使い方

経営学部

田川 光照

最近、電子辞書が急速に普及し、教室でも電子辞書を使っている学生の姿が多くみられるようになった。電子辞書には、もちろん長所もあるが短所もある。以下に、電子辞書を使うにあたって注意すべきことなどを述べておきたい。フランス語と韓国語を中心に述べるが、他の言語にも共通する点が多いので、これら以外の言語を履修している人もぜひ読んでいただきたい。

### 1. 電子辞書の長所

まず、電子辞書一般がもつ長所と短所についてまとめておこう。

長所としてまず第一にあげることができるのは、そのコンパクトさと携帯性である。とりわけ、複数の辞書を持ち歩かなければならない場合、電子辞書ひとつですむので非常に重宝する。筆者の場合、バスや電車の中で調べるために、また海外に出かける時のために電子辞書を持っている。

第二に、収録されている辞書間でのジャンプ機能はありがたい。とくに、たとえば和仏辞典や日韓辞典で調べたフランス語や韓国語の単語、表現などを仏和辞典や韓日辞典で確認する (日本語を外国語に訳すような場合にはこの作業を必ずしなければいけない) 時などに威力を発揮する。あるいは、仏和辞典や韓日辞典で調べた単語の日本語の意味が分からない時に、その意味を調べるのに国語辞典にジャンプするという使い方もありうる。

第三に、最近の電子辞書には音声データが入っているものも多く、単語や例文の発音を確認する

のに役立つであろう。ただし、これには注意が必要であり、それについては後で触れる。

## 2. 電子辞書の短所

次に短所であるが、まず第一に価格の高さをあげることができる。内蔵されている辞書すべてを利用するのであればそれほどではないが、二つか三つくらいの辞書だけを使うのであれば、紙の辞書を買ったほうがはるかに安くつくであろう。

次に、上に述べた長所の一つ目がそのまま短所にもなる。コンパクトで携帯性にすぐれているのはよいが、そのために画面が小さく、とくに重要な単語の全体像がつかみにくいからである。重要な単語はその意味範囲、使用範囲、用法が広く多様で、たとえば、フランス語の動詞《aller》を電子辞書で調べる場合、電子辞書によって異なるが、少なくとも4回はページ繰りをしなければならぬ。用例を見るためにはさらにボタン（キー）を操作して別の画面を見る必要があったりする。重要な単語ほど、紙の辞書で調べるほうがはるかに分かりやすいし、かかる時間も少なくともこの見通しの悪さは電子辞書が持つ宿命的な欠点であり、価格の問題よりもこの点が決定的な短所である。

## 3. 電子辞書を使用するにあたっての注意

### (a) フランス語

上に述べたように、電子辞書の最大の欠点はその見通しの悪さにある。ところで、フランス語は語彙数が少ない言語である。語彙数が少ないということは、単語一つ一つの意味範囲、使用範囲が非常に広いことを意味する。たとえば《mettre》や《prendre》などを調べてもらえば、このことはすぐに理解してもらえらるであろう。したがって、こまめに行繰り、ページ繰りをし、かつ、たとえ用例が別ページになっていてボタン操作をしなければならぬとも、面倒がらずに用例もきちんと見る必要がある。

次に重要なことは、動詞を調べた場合にはジャンプ機能をフルに使うことである。ここで言うジャンプ

は辞書間でのジャンプではなく、動詞活用表へのジャンプである。かつての電子辞書にはこの機能がなかった。しかし、最近のものにはすべてこの機能がついているはずである（もしこの機能がなければ、その電子辞書は買わないほうがよい）。フランス語の勉強は動詞の活用についての勉強であるといっても過言ではない。動詞の法・時制・人称変化の確認を怠ってはならない。電子辞書を使っている人は、どのようにすれば動詞活用表にジャンプできるか、説明書を見て必ず確認していただきたい。

最近の辞書には発音も聞けるようになっているものが多い。しかし、それはほとんど見出し語だけなので、あまり意味がないと思っていただきたい。見出し語の発音を聞いても、その単語が実際に使われる時にはエリジヨンやリエゾンなどの関係で、さらに動詞の場合には変化する関係で、その見出し語の発音そのままでは限らないからである。綴り字と発音との関係など、基本的なことがらをしっかり勉強し、覚えていくことが重要である。そのための補助手段としてであれば、電子辞書の音声聞くのもある程度有効であるかもしれない。

### (b) 韓国語

韓国語についても、フランス語の場合とほとんど同じことが言える。

まず、韓国語もフランス語ほどではないにしても、たとえば英語などと比べれば語彙数は比較的少なく、《가다》《오다》などを見れば分かるように、重要単語の意味範囲や使用範囲は非常に広く、こまめに行繰り、ページ繰りを行い、用例もきちんと見る必要がある。

フランス語の場合と同様、用言、とりわけ変則用言を調べた場合には、活用表にジャンプして確認するのが望ましい。現在出ている電子辞書にはたいていこの機能がついているはずであるが、自分の持っているものにこの機能がついているのかどうか、また、ついている場合にはどうすればジャンプできるのかを確認していただきたい。

辞書で発音を聞くことができる場合、次のこと

に気をつけていただきたい。フランス語の辞書の場合と同様に見出し語の発音しか聞くことができず、さらに辞書の発音を聞いても平音、激音、濃音の区別が分かりにくいだけでなく、次のような事情があるため、あくまで参考程度にとどめるべきで、それを頼りにすべきではない。韓国語は音の変化がきわめて激しい言語で、たとえば、体言の場合には助詞との間でのリエゾン（連音）が起こったり、用言の場合には語幹と語尾との間で音の変化が起こったり、語幹そのものが変化したり、その他さまざまな音の変化がある。したがって、見出し語の発音を聞くだけではほとんど役に立たない。文字と音との関係をしっかり理解し、音の変化に慣れることが重要で、この点では電子辞書の発音はほとんど役立ってくれないのである。

なお、初級の韓国語学習者にとっては、紙のものよりも電子辞書のほうが使いやすい面があるかもしれない。というのは、紙の韓日辞典を使う場合、辞書でのハングルの配列順序が頭に入っていないと調べるのに時間がかかるが（もともと、四苦八苦しているうちに慣れて、さっと調べられるようになるが）、電子辞書の場合にはキーボード（スクリーン・キーボード）を見ながら、ハングルを打ち込んでいけば、辞書でのハングルの配列順序を知らなくても調べることができるからである。とはいえ、辞書での配列順序を知らないと、電子辞書に入っていない辞書を調べなければならなくなったような場合に困ることになるから、覚えなければならないが。

以上、電子辞書を使うにあたって気をつけるべきことをざっと書いた。電子辞書はうまく使いこなせば非常に便利で役立つが、使い方を誤ると、学習にとってマイナスになりかねない危険をも持っている。繰り返せば、コンパクトさ、携帯性が電子辞書の最大の長所であるが、この長所ゆえに見通しの悪さという重大な欠点を免れることができないのである。もしお金に余裕があれば、家では紙の辞書を使い、持ち運びには電子辞書を利用するというのが理想的な使い方である。

## 2人の老人、中国周遊

対外経済貿易大学教授・愛知大学客員教授  
賈 保華

昔から中国には「読万卷書、行万里路」（万卷の本を読み、万里の道を行く）という諺がある。読書と旅行が互いを補完しあい、本から得た知識と実社会から得た経験をもとに、人生を充実させる、という意味である。そして、本ばかり読んでいても駄目だ、外の社会を見なきゃ、という意味も含まれる。

しかし、大多数の人にとって、旅行するにはやはりお金と時間が必要である。特に長距離と長期間の旅行なら、それが必須条件となる。しかし、最近中国では2人の年配者が大したお金も使わず、自転車や徒歩で全国一周という記録を作った。

まず、1人目は甘肅省蘭州市の64歳の男性、蘇徳祥さん。甘肅新聞網10月25日の報道によると、に蘇さんは全国22の省市にわたる自転車旅行を終え、1,000以上の郵便スタンプが押された記念帳と10万字におよぶ旅行記を持って、9月25日蘭州市に戻った。中国の自転車旅行では7万里（=3.5万キロ）の新記録だという。

停年前、蘇さんは同市のある会社の幹部であった。若いときから全国周遊の願いを持っていたが、仕事が忙しく、なかなか暇が無かった。

停年後、かれは全国旅行の準備に取りかかり、2004年4月12日、一台の自転車で蘭州から夢の旅へ出発した。2005年9月までの18ヶ月の間に、彼は人気が無く寂しいゴビ、砂漠、草原も歩けば、賑やかな沿海都市も観光した。この旅行では合わせて22の省、市と自治区を周り、ほぼ2万元を使った。

天候不順などの理由で旅を一旦中止し、家に帰った蘇さんは、どうしても気が済まず、残った地域へぜひ行ってみたいと思った。そして、今年の4月から彼は2回目の旅に出た。蘭州を離れ、まず前回行かなかった内モンゴルに進出し、次に東北三省を横断して、河北省と河南省へ南下、それから甘粛省に帰るというコース。台湾を除けば、今回と前回を合わせて、ほぼ全国周遊の夢が実現した。蘇さんによると、途中、もちろんけがもしたし、危険なめにもあい、今その場面を話すだけでも、身がすくむという。ただし、これらの苦しみはすべて価値のあることであり、「精神的な楽しみが一番重要である」と、蘇さんは満足そうに語った。

面白いことに蘇さんが特別な例外ではなく、もう一人のお年寄りももっとすごい旅の記録をつづった。江蘇省徐州市の「都市晨報」10月20日の記事によると、それは76歳の殷朋傑さんである。

殷さんはいままで数十年の間に15万キロを歩き、中国の2,000以上の名所旧跡と80以上の港や国境地帯を回った。と同時に、140万字の記録と1,000枚以上の写真を撮った。最近、それらの資料に基づき、60万字の旅行記(上・下)を出版した。

その上巻の目次を見れば、こんな内容がある。例えば、香港マカオ9日間隨筆、廬山を上り浙江省江西省に転じ杭州蘇州の徘徊、中州(河南省旧称)の旅、東北樹海ドキュメント、華東5省1市散策、三峡万里風土録、東南沿海隨筆、張家界から雲南行きビルマ国境の後ベトナムへ、東北国境印象、自転車で中原(華北平野)3,000里長駆、海南島の天涯海角(天地の果て)など。

その下巻には黄土高原、青海チベット旅行記、天山南北とタクラマカン砂漠などの内容が含まれる。

「旅との縁」と言うと、殷さんはこう語った。小学校時代、鉄道労働者の子女向けの小学校だったので、毎年学校の旅行があり、しかも列車の切符はただだった。その時から現在までに、台湾以外の全国の33の省市自治区をまわった。いつも簡単な背嚢を背負って1人で出かけるので、占い師

とか薬草の行商ではないかとしばしば聞かれたが、かれはいつも笑って弁解しなかった。途中、遭遇した困難や危険などはもう言葉で言えないほど多かった。泥棒に「ご愛顧」されたことは言うまでもなく、ひどい場合、命を落としそうな事件でさえもあった。

まだ鉄道がなかった2000年のチベットに、69歳の殷さんは子供に遺書を残し、単身旅行をした。青海省のガルム(格爾木)でチベットに行く前の旅行者定例身体検査を受けたが、医者らは無理だとの診断意見を述べた。つまり、殷さんは25年の高血圧と20年来の心臓病持ちだった。しかし、折角のチャンスだと思った殷さんは、医者意見の聞かず、酸素ボンベを背負って、救心薬を持参し、バスで崑崙山脈を越えて、首府ラサ市に挺身した。そこで2週間の観光をした。

中国には「天馬行空、独往独来」(天馬は空を翔るとき、常に単独である)という言葉もあるが、殷さんはこの風格を持つ。つまり、ツアーに入らず、自由自在の旅が好き。だから、万里長城の西端の嘉峪関の城楼で1つのレンガを2時間じっくり見つめたり、新疆ウイグル自治区の火災山で半日ぼうっとしたりできる。歩ける場合は決して車や船に乗らず、山を上る場合はロープウェイを利用しない。これこそ、名所旧跡の方位、規模と特徴が分かると殷さんの経験談。また、いままで殷さんは長いときで2ヶ月、短い場合4、5日間で旅をする。往復の道程は平均1万キロくらい。自転車の利用はたびたびあるという。

殷さんは若いとき、北京気象学校を卒業したが、文学の素養も厚く、140万字の記録をもとにして、この上下2冊からなる旅行記を出版した。

さて、孤独な老齡の旅人の姿を想像しながら、次のことを考えた。いまの時代、技術の進歩によって、生活が大変便利になると同時に、人間と自然との距離も遠くなった。また、「時間は金なり」という市場メカニズムの至上命令、ゆっくり、のんびりした生活との断絶、物の氾濫と心の空虚さ、高度成長と環境破壊、自然との疎外および人間同士の疎外など...。「現代病」とも言える「患者」

が一体どれくらいあるかは分からないが、毎日毎秒増えていることは間違いないであろう。その特效薬は恐らくないが、旅を1つの選択肢として試したらどうかと薦めたい。短期間でもいいから、大自然の懐の中で、美と醜、善と悪、生と死、愛と憎、恒久と瞬間、真実と幻想、古代と現代、現在と将来などなど、もう一度吟味してみよう。大自然に対座し、一人ぼっちで「感触」し、感動し、感慨し、感激し、さらに感泣してみよう。

甘肅新聞網 (<http://www.gs.chinanews.com.cn/news/2006-10-25/1/49484.html>)

「都市晨报」10月20日 ([http://www.tynews.com.cn/shehuifazhi/2006-10/20/content\\_2662770.htm](http://www.tynews.com.cn/shehuifazhi/2006-10/20/content_2662770.htm))

## 英国の方言 リヴァプール編

経営学部  
安藤 聡

リヴァプール方言のことを「スカウス」(Scouse)という。スカウスとは元来は、リヴァプール界隈で昔から食されている鍋料理のことである。ジャガイモとタマネギとニンジンと牛肉あるいは羊肉、さもなくばコーンビーフを煮込んだもので、アイルランドのアイリッシュ・シチューと似ているが、いずれも貧しい労働者の日常的なメニューである。その「スカウス」が転じてリヴァプール市民を指すようになり(『OED』に掲載されているこの用例のもっとも古いものは一九四五年)、さらに転じてリヴァプール方言を意味するようになったのだ。『OED』には一九六三年六月三日付けの『ガーディアン』の記事がこの意味でのもっとも古い用例として引用されているが、この記事の内

容は次のようなものである。「このロックグループはリヴァプールを一夜にしてエンターテインメント界で注目される場所に変えてしまった。このグループの二枚のレコードが発売されてから、ロンドンの業界人にとってはスカウスの単語をいくつか覚えておくことが不可欠になった」。『OED』にはこの部分しか引用されていないので詳しい文脈は不明だが、「このロックグループ」というのは多分ビートルズのことであろう。なお、現在では「リヴァプール市民」のことは「スカウス」というよりも「リヴァパドリアン」(Liverpudlians)、あるいはそれを略して「パドリアン」という方が普通である。これは 'Liverpool' の 'pool' の部分をわざわざ 'pudle' に変えて、さらに人を表す接尾辞 '-ian' を付けて出来た俗語だ。英語で 'pool' といえば「水たまり」や「小さな池」を指すが、リヴァプールの街は混沌としているので 'pudle' (泥沼)の方が似つかわしい、ということで部外者が嘲笑的に、あるいは関係者が自虐的に名付けたのであろう。

リヴァプールはマーズイー川の河口に位置する港町である。十八世紀以降とくに米国との貿易で栄えたが、そのため一九五〇年代から六〇年代にかけては、米国文化の入口としての機能を持っていた。初期のビートルズは米国の黒人音楽(とりわけリズム・アンド・ブルーズなど)の影響を濃厚に受けていたが、これは彼らがリヴァプールで生まれ育ち、また一時期をドイツの同様な機能を持つ港町ハンブルクで過ごしたと密接に関連している。またリヴァプールはアイリッシュ海を挟んでアイルランドと向かい合っているが、このこともこの街の歴史を考える上で極めて重要である。十九世紀にはアイルランドから大量の人口流入があり、現在でもアイルランド系の住民(すなわちカトリック教徒)が多い。ビートルズの四人のうち三人までがアイルランド系であり、それ故に彼らが書く詩にはアイルランド的な機知とユーモアが散見される。

このような歴史的経緯から、スカウスすなわちリヴァプール方言はアイルランド英語と米語の影

響を受けて、さらに人口急増期に他の英国の方言とも混ざり合い、十九世紀後半頃にその特徴的な部分が確立したと言われる。スカウスの特徴として一般に指摘されているのは、独特の鼻にかかったような発音と発話の途中や末尾で唐突に上昇するイントネーションである。個別の音素ごとの特徴としては、まず語尾の 'y' を強く発音することが挙げられる。たとえば 'cloudy' や 'rainy' などの語尾の「イー」が第一強勢の母音と同じくらいの強さで発音される。これは近隣の他の方言にはまったく見られない特徴である。

次にアイルランド方言の影響として、子音 'th' が有声音の場合は 'd'、無声音の場合は 't' に近くなる、ということが指摘できる。これはつまり 'th' を発音する際に舌の先端を十分に上下の前歯の間に入れられないということである。これは日本人の英語にもときどき見られる特徴である。いっぽうで 't' の子音は語尾では「チ」と発音され(たとえば 'night' は「ナイチ」、'front' は「フロンチ」になる)、語中では 'r' の子音で代用される。後者は米語にも見られる特徴であり、たとえば 'letter' は「レラー」、'water' は「ウォラー」になる。だからビートルズは 'Let It Be' のサビを「レリッピー、レリッピー」と歌っているのである。さらに語頭の 'y' や 'd' には 's' に近い子音が混ざり、たとえば 'drink' は [dsrink] (カタカナで敢えて表記すれば「ヅリンク」になるのか)、'toy' は [tsoy] (同じく「ツォイ」というような発音になる。また、ロンドンのコックニーや英国各地の方言と共通する特徴として、語頭の子音 'h' の脱落が指摘できる。またイングランド北部の方言の多くに見られる特徴として、'but' や 'come' などの母音「ア」が「ウ」になることがあり、リヴァプールでもたとえば 'bus' は「ブス」と発音される。

リヴァプール英語の特徴は発音ばかりではない。この地方に特有の語彙や表現は枚挙に暇がないが、全体的に言えることは貧しい生活から生まれた表現、権威に対する反発を示す表現、長い語を略した語尾の「イー」などが多く見られることである。また、性行為や飲酒に関連する語彙が異常に豊富

なもの特徴のひとつであろう。

貧しい生活から生まれた表現としては、たとえば 'blind scouse' を挙げる事が出来る。これはいわゆる鍋料理としての「スカウス」の、肉を入れないものである。もちろん、ヴェジタリアン向けのスカウスということではない。スカウスに入れる牛肉や羊肉は安い細切れ肉であるが、それさえも買うことが出来ない人たちが仕方なく食するのがこの「ブラインド・スカウス」なのだ。(尤も敬虔なカトリック教徒であるパドリアンたちは、たとえ金があっても金曜日にはブラインド・スカウスを食べるのであろうが。) また同様な例としてマーガリンとマスタードを塗ったパンを二枚重ねたものの謂いで 'mock ham sandwich' (偽ハムサンド) というのがある。一方で「代金」や「価格」を意味する 'damage' もこの種の語彙のひとつであろう。買い物をするときに支払う金額はそれだけの「損害」あるいは「痛手」なのである。また「着飾った状態」を表す 'dressed up' がこの地の方言では 'costy' 「高い」と表現されるのも面白い。権威に対する反発が現れている最も特徴的な語として、「警察官」を意味する 'filth' が挙げられよう。この単語の通常の意味は「汚物」、「ゴミ」、「墮落」だ。

性に関する語彙が多いことは方言や特定の世代間の俗語の多くに共有される特徴だが、スカウスにおいてはその数が普通でない。代表的なものをアルファベット順に紹介して行こう。'anytime Annie' 「いつでもアニー」というのは「売春婦」のことであるが、何故「アニー」なのかは不明。有名な伝説的娼婦がリヴァプールにいて、それがアニーという名前だったのかも知れないし単に「エニー」との語呂合わせかも知れない。動詞で 'bag off' は「性交のために密会すること」、'berd-watcher' は「女に色目を使う男」だが、当然 'bird-watcher' に引っかけた洒落で、'berd' はイングランド北部やスコットランド方言で「少女」あるいは「淑女」を意味する ('burd' とも綴る)。「女性器」を 'box' と称するのは米国伝来であろう。また「性行為を途中でやめる」ことを 'get off at Edge Hill' 「エッジ・ヒルで降りる」と表現する。

エッジ・ヒルはリヴァプールのターミナル駅であるライム・ストリートの手前にある駅だ。英語で 'House of Commons' と言えば普通は「下院」だが、リヴァプールでは「売春婦の性器」をも意味する。「ランチタイムに性行為を行う」ことは 'do a matinee' である (matinee は芝居などの「昼の部の上演」)。他にも性関連の語彙は枚挙に暇がないが、とてもここには書けないようなものばかりなのでこれくらいにしておきたい。

飲酒関連の語句が異常に多いのは、やはりアイルランド系住民が多いからであろう。何しろ、アイルランドと言えばスタウト (stout: 黒ビール。一番有名なのはギネス) である。飲酒に関するリヴァプールの語彙をアルファベット順に紹介すると、まずは「いつまでも飲み続けること」を意味する 'bender' というのがある。次に「酔っぱらった」という意味の 'bevved' というのがあるが、これは次の段落で紹介する 'bevvy' を動詞に転用し、その過去分詞形を形容詞として使っているのである。また 'blitzed' も「泥酔した」という意味の分詞形容詞だが、元来の意味はもちろん「空襲を受けた」である。同じく泥酔した状態を表す 'chemicked'、'kaylied' という分詞形容詞もある。さらにどうしようもなく酔っぱらった状態を表すのは 'lushed' である。一方でほろ酔いの状態を表す形容詞として 'merry' がある。他にもひどく酔った状態を表す形容詞として 'palatick' と 'rotten' もあるが、前者は「ワインの識別力」を意味する 'palate' と関係があるのかわからないか不明、後者は「腐った」、「異臭を放つ」が元来の意味である。また「酔いつつある状態」を表す 'well away' は「(通常の状態から)十分に離れた状態」が原義だろうか。「難破した」という意味の 'wrecked' もまた「酔っぱらった」という意味で使われる。これだけ多くの語句があるということは、リヴァプールにはそれだけ泥酔者が多いということを如実に表していると言える。

語尾の「イー」を強く発音することがこの地方の英語の特徴の一つであることにはすでに触れた。一方で長い単語の後半を「イー」に置き換えることは全国的に見られる特徴だが (たとえば

'football' を 'footy'、'chocolate' を 'chocky' とするような例。主に幼児語だが、大人も使わなくはない)、リヴァプールにはこのようにして成立した俗語が非常に多い。たとえば「飲み物」、とくに「ビール」を意味する 'bevvy' ( beverage)、'フィッシュ・アンド・チップス店' 'chippy'、'煙草' 'ciggie' ( cigarette)、'便所' 'lavvy' ( lavatory)、'牛乳配達人' 'milkie' ( milk man)、'携帯電話' 'mobie' ( mobile phone)、'家賃集金人' 'rennie' ( rent collector)、'ズボン吊り' 'sussies' ( suspenders) などである。ほかに語源がよくわからないものとして「ゴミ収集人' 'binnie' ('dust bin' の 'bin' か?)、'サンドウィッチ' 'butty' ('butter' と関係があるのか?)、'電気屋' 'lecky' ('electricity' の 'lec' の部分か?)、'病院' 'ozzy' ('hospital' の 'os' か?) などがある。このうちのいくつか、たとえば「チップー」や「スイギー」などは他の地方でも普通に使われる。

スカウスに関してひとつ気になることがある。それは、鼻に関する語 (句) が妙に多いことである。リヴァプール方言が鼻にかかった発音になることと何か関係があるのだろうか? 「鼻」を意味する単語には、'bewdle'、'boodle'、'bugle' などがあり、また 'goobie' は「鼻をほじること」、'nuck nose' は「硝子窓に押し当てられて平たくつぶれた鼻」である。一方で、「鼻の上の自転車」'bike on the nose' は「眼鏡」である。'Ee's gorra bike onniz nose.' と言えば、「あの男は眼鏡をかけている」(He's got a bike on his nose.) という意味だ。

この最後の例のように、スカウスにはちょっとした言い回しに独特のユーモアを込めたものが散見される。例えば「牛乳」を 'cow juice' と表現したり、背が高い人のことを 'cud wind de Liver clock' (could wind the Liver clock: リヴァー・クロックのネジを巻くことができる) と言ったりする。リヴァー・クロックというのはリヴァプールのランドマーク的建築物「リヴァー・ビルディング」の時計台であり、この時計に手が届くほど背が高い、ということだ。また「高架鉄道」を 'docker's umbrella' 「港湾労働者の傘」と呼ぶ。

「人工中絶を行う診療所」を意味する 'Irish takeaway' には少しばかり説明が必要であろう。まず、英国には「お持ち帰り専門の中華料理店」'Chinese takeaway' というのがある。同様に 'Indian takeaway' というのもよく見かける。ちなみに、「お持ち帰り」を「テイクアウト」と言うのは米語であり、英語では「テイクアウェイ」だ。それで、「アイルランド料理のお持ち帰り専門店」というのは原則として存在しない。一方で、アイルランドは敬虔なカトリック国であるゆえ、人工中絶は禁止されている。そこで、望まない妊娠をしてしまったアイルランドの女性は、密かに海を渡ってリヴァプールへ中絶手術を受けに行くのであり、そこから生まれた表現が Irish takeaway なのである。一方で「新聞紙」を 'linen' と言うのも面白い。また 'louse ladders' 「シラミの梯子」というのはモミアゲのことである。さらに 'two bagger' 「袋二枚の人」というのがあり、これは「人並み外れたブス」を意味する。とても見るに耐えない顔なので紙袋を被せておかなければならず、しかもその紙袋が落ちてしまった場合のためにも一枚被せておかなければならない、ということなのである。それから、「喉が渇いている状態」を表すのに、'as dry as a witch's tit' などと言う。この 'tit' は「乳首」だが、「魔女の乳首」とは一体どのようなものか。確かに『ナルニア国物語』に登場する魔女はそれなりに美女ばかりだが、一般的に魔女は不気味な老婆ということになっている。それで、年老いた魔女の乳首というのは干乾びたものの喩えなのであろうか。このイディオムは飲酒関連の方に分類するべきかもしれない。

リヴァプールにはイングランド国教会とカトリック教会と、二つの大聖堂がある。このうちカトリックの大聖堂は英国の大聖堂とは思えないような超近代的なものだが、これのことを 'Paddy's Wigwam' 「パディのテント小屋」と言う。Paddy とはアイルランドによくある名前 (Patrick の愛称) で、アイルランド人一般を指す呼称としても使われる。カトリック教徒の大部分はアイルランドからの移民であるため、この大聖堂は「パディ

のテント小屋」と呼ばれるのだ。この大聖堂には他にも、'launching pad' (ミサイル発射台のことで、その建物の形からの連想だが、同時に 'pad' を 'Paddy' に掛けている) とか 'Mersey Funnel' (マーズイー川の漏斗。これも形態からの発想) とも呼ばれる。パディ関連ではもうひとつ、グレイト・ホウマー・ストリートの中古品市を 'Paddy's market' という。

他にもリヴァプールの表現として、'o'clock' を 'bells' というのがある。「七時に会いましょう」は 'See you at seven bells.' になる。また「素晴らしい！」という意味の感嘆詞 'boss!' や、フットボールのゴールキーパーを 'cat' というのもリヴァプールの表現である。また 'judy' は女性全般を意味し、'kid' は何故か「弟」を意味する。「タレント」(talent) は「才能」や「芸能人」ではなく「美男美女」を意味する。人と別れるときには 'goodbye' よりも 'ta-ra' の方がリヴァプールの表現であり、相手が言ったことを聞き返すときにも



リヴァー・クロック：リヴァプールのランドマークのひとつ



パディのテント小屋、またはマーズイー川の漏斗

'sorry?' とか 'I beg your pardon?' よりも 'yer wha?' がよい。礼を言うときに 'thank you' の代わりに 'ta' と言うのはイングランド南部やウェイルズでよく耳にするが、これもリヴァプールでも使われる。

つなぎの言葉として文頭、文中、文尾を問わず頻出する（標準英語の 'you know' に相当する）間投詞として 'like' というのがある。ただし、これも必ずしもリヴァプール方言に限った用法ではない。夏目漱石の『坊っちゃん』の英訳版（アラン・ターナー訳）では、語尾の「ぞなもし」をこの 'like' で表現していた。

## ギリシア・ローマ神話と現代 (2) 新惑星エリスの名前の由来

経営学部  
山田 晶子

惑星の名前には、ギリシア・ローマ神話から取られたものがある。今年の9月13日に、国際天文学連合 (IAU) が命名した新惑星「2003UB313」の名前「エリス」もそうである。エリスが惑星に昇格したために、以前は惑星であったがエリスよりも小型のために矮惑星に降格された冥王星「プルートー」の名前もギリシア・ローマ神話に由来がある。また、火星「マース」、水星「マーキュリー」、木星「ジュピター」、金星「ヴィーナス」、土星「サターン」の名前も、全てギリシア・ローマ神話から来ている。この他、太陽や月、様々な星の名前もギリシア・ローマ神話から取られているが、今回は、新惑星「エリス」の名前の由来とそれに関わる話を書こうと思う。

「エリス」は女神の名前である。しかし「女神」

という神々しい言葉から受ける印象に反して、「エリス」は不吉な名前なのである。女神には美や優しさや勇気や愛という心地よい響きと関係する神々だけではなくて、復讐や不和等の怖い性質を備えた神々が含まれているのである。そしてエリスという女神は「不和」を司る女神なのである。「エリス」はギリシア名で、ラテン名はディスコルディア (Discordia) であり、英語 "discord"（「不和」「仲たがひ」の意味）の源になった語である。エリスは、ギリシア・ローマ神話の中では目だっていない女神であると考えられるが、あの有名なトロイ戦争を引き起こした陰の張本人であることを考えれば、表立って目立っていなくても重要な存在なのだと分かる。

では、トロイ戦争はいかにして勃発したのだろうか。19世紀に、ドイツ人シュリーマンがトロイの遺跡を発見して以来、ギリシア人ホメロス作の『イーリアス』と『オデュッセイア』に登場しているトロイという国は、実在していた国であることが分かっている、現在の小アジア（トルコ）に位置していたと思われる。トロイの国には美貌で有名な王子パリスがいた。彼の兄がヘクターであった。

さて、不和の女神エリスは、ジュピター（ギリシア名ゼウス）の愛人テティスとペレウスの結婚式に招待されなかったことに腹を立てていた。招待されなかったのは彼女が「不和」をもたらす女神であったからやむを得なかったと言えよう。しかし、エリスは何となく自分の不名誉の仕返しをしたいと思っていて、オリンポスで結婚式が盛大に行われていた際に、黄金のりんごを投げ込んだ。そのりんごには「一番美しい者がこれを手に入れることができる」と書かれていた。これを見て、ジュピターの正妻であるジュノーと女神ヴィーナス、そして女神アテナ（ミネルヴァ）の三人が、自分こそが一番美しいからりんごを手に入れる、と全世界で最高の美女の称号を得ようとして立候補した。三人のうちで誰が一番美しいかを審判する役割を当てられたのが、トロイの国のパリス王子であった。三人の女神は、パリスに、もし自分

を一番美しいと判定してくれたら御礼にこういう褒美を上げようと交渉をした。これが有名な「パリスの審判」である。さて、あなたは誰が最高の美女神に選ばれたと思うであろうか。ヴィーナスは、もし自分を選んでくれたら「世界一美しい(人間の)女性」を上げると言い、ジューノーは「世界を統治する権利」を上げると言い、アテナは「あらゆる戦争での勝利」を上げると言った。あなたが男性であったならば、どの褒美を選ぶであろうか。美貌の王子パリスは、ヴィーナスを一番美しい女神に選んだ。ゆえに今日までヴィーナスは「愛と美の女神」としての名声を保っているのである。そしてパリスは世界で一番の美女を手に入れるはずであった。

さて、当時世界で一番美しいと言われていた女性はトロイのヘレン(ヘレナ或いはヘレネとも呼ばれる)であった。ヘレンは、白鳥に変身したジュピターが美女レダに産ませた女性であった。だから半分は神の血を引いていると言える。彼女は、ギリシアの王アガメムノンの弟であるメネラオス王の妻であった。しかしパリスは強引に人妻ヘレンを奪ってトロイへ連れてきてしまったのである。数年前に、映画『トロイ』が作製されて日本でも上映され、好評を博した。あの映画ではアキレス(「アキレス腱」という言葉の元になったギリシアの英雄)が主人公であったが、ヘレンとパリスの恋愛もかなり詳しく描かれていたので、興味がある人は『トロイ』をビデオテープで観てほしい。映画の中では、ヘレンはかなり年上の夫メネラオスと政略結婚させられたのであり、夫を愛してはいなかったことになっている。それゆえに美貌の王子パリスにはたちまち心を奪われてしまったのである。

だが、ギリシアの王メネラオスは、自分の妻を奪われて黙っているわけにはいかなかったし、彼の兄のアガメムノンもかねてからトロイを征服したいと思っていたので、弟の妻ヘレンをトロイの王子に奪われたことを、トロイに戦争を仕掛けるための絶好の口実にした。彼は、当時の都市国家をまとめギリシア全軍を組織して、表向きはヘレ

ン奪回のためにトロイへ遠征に出かけたのである。トロイは堅固な要塞に囲まれ、陥落させるのは容易ではなかった。しかしギリシアの知将として有名であったオデュッセウス(都市国家イタカの王)が、かの有名な「トロイの木馬」を思いついて作戦を立て、遂にトロイを陥落させたのであった。このトロイ遠征の一連の話と、オデュッセウスが故郷のギリシアの自分の国イタカへ帰郷するまでの一連の物語がホメロス作の『オデュッセイア』(ラテン名から来た英語では『ユリシーズ』と言う)である。

上述したように、不和の女神エリスのせいでトロイ戦争は始まったのであった。そして、今回新惑星になぜ「エリス」と名前がつけられたのかと言えば、旧惑星「プルートー」を矮惑星に降格させてエリスを新惑星に昇格することに反対した科学者たちがいて、学者の間で論争があったためと考えられる。新惑星は科学者間に不和を生じさせたので、その結果「エリス」と命名されたのであると思われる。

## コラム

### 韓国雑学：ことばと文化の散策

ふるさと あせい  
古里 亜星

#### 【一】ノドンとテポドン

質問 「北朝鮮のミサイル。ノドンとかテポドンとかドン・ドンが付くのはなぜ？ ノドン、テポドンって名前、なにか意味があんの？」

解答1 まず「ノドン」。1993年に発射された1段式ミサイル。私をはじめ、韓国人の多くも誤解していたようだが、実はこの名は朝鮮労働党の「労働：ノドン、노동」に由来する名ではなかった。ノドンとは、同ミサイル実験施設のある地名「蘆洞：ノドン、노동」から取って、アメリカを

中心とする西側がつけた名称。つまり西側がつけたコード・ネームであった。近年、北朝鮮での公式名称が「木星：モクソン」であることが明らかとなっている。

解答2 1998年に発射された3段式ミサイル「テポドン」も同様、同ミサイル実験・発射施設のある地名 咸鏡北道、<sup>フアデェグン</sup>花台郡、<sup>ムスリ</sup>舞水里 の旧名称「大浦洞：テポドン、대포동」にちなみ西側がつけた名称。こちらの方も近年、北での公式名称が「白頭山：ベクツウサン」であることが明らかとなっている。

以上、ノドンは「<sup>ノドン</sup>蘆洞」、テポドンは「<sup>テポドン</sup>大浦洞」というそれぞれ地名にちなんで西側がつけたミサイルの通称であり、それぞれ公式名称は「木星」「白頭山」であった。(和田/石坂, 編『岩波小辞典：現代韓国・朝鮮』2002.参)

解答3 ではノドン、テポドンの「ドン」とは何か？

「ドン：洞、동」は、日本の住所表示で言えば「町」に近い(ただし、一般的に日本の「町」よりも広く、人口も多い)。韓国の代表的住所を示してみよう。

156-756 Seoul 特別市 銅雀区 黒石洞 221  
中央大学校

431-070 京畿道 安養市 東安区 平村洞  
現代 APT.108-1005 朴英和

330-070 忠清南道 天安市 院城洞 29 裴勇俊  
「～区」、または「～市」の次に来る「洞：ドン」が日本の「町」に当たることが分るのであろう(なお、頭の数字は郵便番号の類)。ソウルの繁華街「明・洞：ミョンドン」や骨董品街「仁寺・洞：インサドン」もこの「洞」。——《まとめ》「ノドン」「テポドン」の「洞：ドン」は、日本の「町」に当たる住所区画の一であった。

## 【二】韓国人の姓(苗字)

日本人の「姓」が一体どれだけあるのかは、正確には分っていない。生命保険会社の資料による調査しかないからだ。分っているのは、少なくとも150,000以上～300,000以内の「姓」が存するということだという。日本人の姓の多さは、世界でも異例だそうだ。

これに対し、韓国人の「姓」は300以内、正確には280ほどである(最近、日本から帰化した「岡田」などの新種の姓が追加され、徐々にその数が増えているようだ)。いずれにしろ15～30万対3百というのは、驚くべき対比だという他なく、ここから様々な異文化現象が起きる。

韓国では「三大姓」と称されるベスト3の姓があり「<sup>キム</sup>金」「<sup>イ</sup>李」「<sup>パク</sup>朴」の順であり、この三つの姓が韓国民の約半分近くを占める。例えば大学の教室。50名のクラスでも、なにしろクラスの半分はこの「金、李、朴」であるのだから、「金さん」などと名前を呼んでも10名以上の学生が「はい!」「はい!」「はい!」とあちらこちらで返事する。「李さん」も「朴さん」も同様であるばかりか、「<sup>チュウ</sup>崔」「<sup>チヨン</sup>鄭」「<sup>イム</sup>林」なども多い。つまり韓国社会では、学生であれ誰であれ「金さん」では識別の用をはたさず、「<sup>イスンフン</sup>李勝勲氏(「氏」は「さん」に当たる)のごとく「フル・ネーム」で名前を覚え、かつ用いなければいけないのである。幼少の頃から学校や地域などでフル・ネームで呼ばれることに慣れている韓国人は、急に「姓」だけで呼ばれると何かそぐわない違和感を抱える。韓国人留学生に対しては、是非フル・ネームで呼びたいものである。そして親しくなれば、「Given Name」つまり「勝勲さん」と呼ぶ。いずれにしても普通「姓」だけで呼ぶ、呼ばれるという習慣はない(ただし、「<sup>キム</sup>金先生任」とか「<sup>キム</sup>金課長任」のように姓の下に職名と様に当たる任を付加する場合などはある)。

それだけではない。「同姓同名」の学生も多いのだ。例えば「金美姫：<sup>キム</sup>ミヒ」という学生が60名のクラスに3名もいたりする。教務課の学生名簿は最初から「金美姫A,B,C」と区別しており、教室でも「金美姫Aさん」「金美姫Bさん」などと呼ぶ。教室でも苦労するが、特に試験の採点時や成績記入時などには、つい間違えてしまいそうになる。

このことは社会生活にも様々な影響を与える。例えば韓国では「電話帳」はほとんど役に立たない。「金美姫」を調べてみても、2ページにわたって延々と続くからだ。また「印鑑」も必ずフル・ネームのものを作っておかないと、銀行や郵便局

で断られたりする。あるいは韓国では犯罪者の検挙率が低いと言われるが、おそらくはこうした同姓の多さ、同姓同名の多さによる部分が無関係ではないだろうとされる。同様この国の郵便事情の悪さも、ここに起因すると言われる。

学生の中には「林信子、イム・シンジャ」や「南正男、ナム・ジョンナム」など「日本に是非留学しなさい」と言いたくなるような名前の学生がいる。かと思えば、「金玉子、キム・オクチャ」という女学生、「金万珍、キム・マンジン」という大変優秀だった男子学生など、内心「日本にだけは留学してほしい」などと思う学生もいた（しかし「金万珍」君は日本に留学してしまった）。逆に、日本人で「上野：ウエノ」、「関：セキ」、「井関：イセキ」、「柴：シバ」、「柴田：シバタ」、「野間：ノマ」、「井野間：イノマ」などの姓の学生が韓国に留学すれば、ひととき目立つ存在となり注目を引くのは間違いない。国際化とは、こうした類の影や光を伴うものだ。

意外と知られていない一つは、韓国女性は結婚しても「姓」が変わらないという点。またこれに関連して、韓国の一般のマンション家庭などには「表札」がないことも意外と知られていない。つまり中国や台湾と同様、韓国では「夫婦別姓」である。ゆえに、例えば3世代が同居していれば、その家庭には3つの「姓」の家族が同居していることとなる。嫁いで来た「おばあちゃん」と「お母さん」の姓は他の家族とは異なるからだ（子供は父の姓を受け継ぐ）。この場合「表札」には3つの「姓」名を書かなければならなくなる。夫婦二人だけの家庭でも「表札」には二つの「姓」名を記さなければならない。従ってそんな面倒な「表札」など、実際郵便配達などの役にも立たないので、作らないのである。

なお、ついでに言えば日本でも「夫婦同姓」となったのは明治30年代以降のことである。それまでは武士社会においても、一部の例外を除き基本的に夫婦別姓であった。例えば明治26年になっても内務省は、女性は結婚後も「生家ノ姓ヲ称スル」ことを指令している。歴史的には一般に、キリスト教国では夫婦同姓、それ以外の文化圏（儒教圏、イスラム圏など）では夫婦別姓であったようだ。

日本では、明治の中期以降にいたり欧米キリスト教国の影響下、あるいはそれをモデル化したため、政府主導で「夫婦同姓」にしたわけだ（加地伸行『儒教とは何か』中公新書、'90、参）。

韓国人は日本人よりはるかに「姓」を重要視する。それは個人の愛着の問題などではなく、歴史伝統に基づく社会的規範だと言ってよい。従って、かつては「姓」を変えたり捨てたりすることは、一族と社会に対する違反・背信とみなされた。在日1世や2世が帰化を拒んだ理由の一は、この「姓」の変更に対する拒否にあったといわれる。しかし社会が移り時代が変わるとともに、日本のみではなくアメリカ移住の韓国人社会でも「夫婦同姓」という米国社会への自然な適合化が急速に進んでいるという。

追記。このコラム「韓国雑学：ことばと文化の散策」は、全学生、全教職員に解放しているコーナーですので、「韓国旅行記」「韓ドラ記」などなど、どなたでも御自由に投稿ください。問合せ「語研(須藤)」まで。

# (海外最新事情)

## イギリス

### (1) 最新式速度探知撮影機

英国ではここ何年かの中に、自動車の速度違反を取り締まるための速度探知撮影機の数が増えている。昨年夏に購入した英国全土の道路地図には、速度探知機が設置されている場所が記号で示されていたが、実際に走行していると地図に表示されている箇所より遙かに多くの場所でこの機械を見かけた。地図が編集された後でまた増えたということなのであろう。

現在あるこのような装置は、日本にあるそれと同様、固定された箇所から通過する車の速度を感知して、制限速度を一定以上超過して走行している車を自動で撮影するものである。この装置を‘Gatso’と呼ぶらしい。日常会話ではもちろん‘speed camera’と言っているが、また、二カ所に固定されたカメラの間を走行した車の平均速度を瞬時に計算し、一定以上超過している場合に自動撮影する‘Specs’というタイプのももあるが、これは非常に高価であり（一組数十万ポンド）、実用性に乏しいという。

そこで今回、二台のうちの片方を可動式にした、比較的安価な（一組2万ポンド）最新式スピードカメラ‘Spike’が開発された。2006年10月10日付けの『テレグラフ』によると、二台のカメラの間隔はどんな距離でもいいのだそうだ。この記事には、スピードカメラ反対運動家（というのがいるらしい）のコメントが掲載されている。この人はポール・スミスという名前なのだが、「こんなものがそこら中に設置された日には、ほとんど数秒ごとに速度計を見ながら運転しなければならなくなる」と述べている。

だが英国は偉大なる経験主義の国であるゆえか、制限速度の設定も実態に即している。高速道路で時速70マイル（112キロ）、一般道路で60マイル（96キロ）、市街地では30マイル（48キロ）である。この程度の制限速度なら文字通り遵守することが出来よう。日本でも最近、警視庁が制限速度を見直すことを検討し始めたようだが、是非とも英国的経験主義を見習って実態に即した速度設定にしてもらいたいものである。

### (2) 伝統的ファースト・フードの行く末

昨年の『語研ニュース』第13号で地球温暖化と北海の魚類の分布（特にフィッシュ・アンド・チップスの主要メニューとなる鱈の一種コッドの生息域の北上）についてお話ししたが、問題はそればかりではなく、実は北海ではコッドの絶対数が急激に減少し、このままでは絶滅さえ危惧されるという。2006年10月18日の『タイムズ』によれば、国際海洋開発会議（the International Council for the Exploration of the Sea: 略称ICES）が警告を発し、北海のコッドを絶滅から救うには禁漁以外に方法がないと言っているのだそうだ。このICESがコッドの禁漁を提言するのは今回が初めてではなく、すでにスコットランドでは今年になってからコッドの捕獲量を15パーセント削減したという。大手スーパー〈アズダ〉では夏の間北海産のコッドの販売を中止していた。

ICESはまた、コッドを保護するためにはハドック（同じく鱈の一種）やブレイス（鰈の一種）の捕獲をも全面禁止する必要があるとも言っている。何故ならハドックやブレイスを獲っているときにコッドも一緒に獲れてしまい、しかもそれはコッドの捕獲制限を越えた分なので、仕方なくコッド

の死骸を海に捨てているのだそうだ。しかもこうして捨てられるコッドの量は年間捕獲量の二倍に相当するという。コッドはハドックやブレイスよりも大きいので、コッドだけが網に掛からないようにする方法はないらしい。

コッドばかりでなくハドックやブレイスもまた、フィッシュ・アンド・チップスの定番メニューである。北海でのこれらの魚の捕獲が禁止されれば、これらのメニューの価格が暴騰することは明らかである。ただでさえ、米国伝来の各種ファーストフードに押されて、伝統的なフィッシュ・アンド・チップスの店はここ数十年で急速に減少している。しかもこのところ、英国では肥満が国民的問題になっていて、フィッシュ・アンド・チップスもその元凶のひとつとされている。何しろ英国は、首相自らが国民に向かって「野菜や果物をもっと食べよう」などと言っているような国なのである。だがしかし、健康によくないにもかかわらず、あるいはよくないがゆえに余計に、美味に感じられる食品というのも確かに存在するのだ。この英国の伝統的ファーストフードもまたそのひとつに違いない。

(安藤 聡)

## フランス

### 看護学生たちのデモ

フランスでは、街頭デモやストが頻繁に行われ、政治を動かすこともしばしばある。これまで、本誌あるいはこのコーナーでしばしば紹介してきた。デモは、フランスの伝統といっても過言ではない。

ごく最近では、「全国看護学生連盟」(FNESI)の呼びかけで2006年11月2日に看護学生らによるデモがあった。パリでは、フランス全国から、警察発表で3000人、主催者発表で6000人が参加したほか、マルセイユでは1500人(主催者発表)、ポルドーとモンペリエでそれぞれ600人ずつ、トゥールーズでは500人がデモを行った。

彼らの要求は、他の学生との不平等解消にある。

他の学生の身分や学位認定が教育省の所轄下にあるのに対し、看護師を目指す彼らの場合には厚生省の所轄下にあるという制度上の違いから、他の学生が受けることのできるサービスや扶助を受けられないなどの不平等があるためである。具体的には次の要求を掲げている。

- ・ LMD (注) への移行の枠内の大学化により、正当で現実にあった教育の認知を行うこと。教育期間が3年であるにもかかわらず、2年終了と同等の扱いになっている。
- ・ 教育機関のあり方を改革し、学生の身分の正当な価値を認め、時代遅れの実践と規則を廃すること。
- ・ 看護学生に対する扶助制度を改革し、すべての学生間での真の平等を実現すること。

ところで、本年4月に、ストとデモによって新雇用法が撤回に追い込まれたことは、記憶に新しい。この出来事はわが国でも大きく報道されたが、振り返っておけば、1月に導入された新雇用法、すなわち、26歳以下の若者について、初回採用2年間の試用期間中は、なんの理由説明もなく企業が解雇できるという法律に対する抵抗運動であった。3月7日には全国各地で100万人の労働者や学生、年金生活者らによるデモが行われ、4月4日には300万人が抗議行動に参加したとされる。

今回の看護学生たちの抗議運動は、それに比べればはるかに規模が小さく(フランスでの一般的なデモと比べても規模は小さいほうである)、また要求内容もささやかであるとは言えるが、フランス全国で8万人いるとされる看護学生たち自身にとっては切実な要求運動である。FNESIの呼びかけによる同趣旨のデモは2003年11月にも6000人以上を動員して行われたが、今度こそ彼らの要求は聞き入れられるであろうか。

(注) フランスでは、2003 - 2004年度からEU諸国共通の学位制度への移行がはじまった。3年間のLicence課程(DEUG・2年+Licence・1年)、

2年間の Master 課程 (Maitrise・1年 + DEA・1年または DESS・1年)、Doctorat 課程 (3年～) を合わせて、LMD と呼ばれる。

2006年11月3日・記 (田川光照)

## スロベニア

### スロベニアには“愛”がある

2006年8月、学会発表のため、筆者はスロベニア共和国を訪れた。

みなさんは、スロベニアについてどの程度ご存知だろうか。聞いたことはあるけれど、どこにあるかはわからない、という人も多いのではないだろうか。事実、スロベニアから帰ってくると、友人知人から「スロバキアはどうだった？」と聞かれることが多かった。そこで、まだ日本にとって馴染みの薄い「スロベニア共和国」を紹介しようと思う。



スロベニアは、約2万km<sup>2</sup>という四国とほぼ同じ面積に日本の人口のほぼ60分の1にあたる約200万人が住む、中欧の小さな国家だ。北はオーストリア、東はハンガリー、南はクロアチア、西はイタリアと接していて、それぞれの文化の影響を受けている。例えばスロベニア料理である。オーストリア風のケーキ、ハンガリー風の煮込み料理が有名だ。ピザやパスタも本場イタリアよりずっ

と安くてしかも大変おいしい。

日本からの直行便は無く、近隣国から入ることになる。筆者の場合、UAEのドバイを経由してオーストリアのウィーンに飛び、そこから国際鉄道でスロベニアへ入った。国境ではパスポートの検問がまったく無く、トンネルを抜け、気がつくとそこはスロベニアであった(帰りはヒースロー空港でのテロ未遂の影響か、パスポートチェックがあった)。

スロベニアの第一印象は、独立して間もない国らしい若々しさだった。スロベニアは、もともと旧ユーゴスラビアを構成する6共和国の一つであったが、ソ連の崩壊、東欧革命の影響を受け1991年に独立を宣言したのである。その際、旧ユーゴ連邦軍と10日間の武力衝突が発生したが、ECの調停により停戦が成立、92年にはEU各国等から国家として承認されている(日本もこの年承認)。15年経った今、民主化も経済改革も順調に進み、物質的な豊かさは先進国並みとは言えないが、人々はゆったりと生活を楽しんでいるようにみえる。学会が行われた首都リュブリャナは、これからまだまだ成長していく若者のように、明日が今日より輝いていると信じていられる街である。古い街並みに若々しさを宿した不思議な魅力を感じた。

スロベニアの公用語は、スラヴ語派南スラヴ語群に属するスロベニア語である。ホテルから会場のリュブリャナ大学までバスで15分ほどだったが、英語がほとんど通じない状況でスロベニア語のわからない筆者は「降りるべきバス停に着いたら教えてくれ」と身振り手振りで頑張り、何とか学会会場に着くことができた。会場のリュブリャナ大学には1995年に日本研究講座が開設され、約200人の学生が日本語や日本文学、翻訳技術、東アジア史などを学んでいる。おかげで会場に入れば、ありがたいことにすべて日本語でOKだ。

また、スロベニアは、現在観光産業に力を入れている。アルプス山脈の南端には、世界中から観光客が登山やスキーにやってくる。また、アドリア海沿いの短い海岸線ではプチセレブなりリゾートが楽しめる。内陸部は鍾乳洞の宝庫で、巨大なボ

ストイナ鍾乳洞が世界遺産に登録されている。日本人観光客も2005年には年間1万2152人がスロベニアを訪れている。

それに比べて在留日本人は非常に少なく59人(2006年)、在日スロベニア人はもっと少ない129人(2005年)となっている。これではせっかく日本研究講座を卒業してもなかなか仕事が見つからない。日本企業が進出し、留学交流などが盛んになることが期待される。

観光以外に、スロベニアが力を入れているのはワインの輸出である。朝日新聞にも紹介されているが、スロベニアは2000年を超えるワイン造りの歴史を持つといわれる。筆者はリュブリャナ大学日本研究のアンドレイ・ベケシュ教授のご案内にて醸造会社直営のワインバーを訪れ、「名古屋話」に花を咲かせながら赤、白、ロゼとご相伴した(教授は名古屋に半年ほど滞在し戻ったばかりで、地下鉄東山線の多言語アナウンスにいたく感激したご様子)。ワインはまったくどれも個性的ですばらしい味だったが、欧州市場はだぶついたワインに悩む激戦区であり、知名度の低いスロベニアワインには厳しい戦いになりそうだ。現在、醸造家たちは輸出用高級ワインの生産に力を入れているそうで、日本でもおいしいスロベニアワインが飲める日もそう遠くは無いかもしれない。

さて、ここまで読み進めた読者はすでにスロベニアに詳しくなっているはずだが、それでもまだスロバキアと間違えそうなら、「スロベニアには“愛”がある」と覚えてほしい。スロベニアの綴りは“Slovenia”、つまり love があるのだ。愛を探している人、スロベニアを訪れてみてはいかが？

#### 参考文献：

重盛千香子「リュブリャナ大学文学部アジア・アフリカ研究学科日本研究講座2004/2005年度機関報告」『日本語教育連絡会議論文集』VOL.18, 2006

朝日新聞「スロベニア産ワインいかが ユーロ導入、輸出に活路」2006年7月13日朝刊  
地図・統計資料の出典は外務省ホームページ

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/slovenia/> (2006年11月6日閲覧) (梅田康子)

## 中国

### 北京大学副教授の悲劇

中国語でブログのことを「博客(bó kè)」と言う。これはブログという外来語に、「博(bó)」という漢字の音と「客(kè)」という漢字の音をあてた、いわゆる音訳である。ただブログは、幅広い訪問者(客人)に読まれることを想定したWeb上の日記であることから、おそらく「博い客」という意味も、そこには含まれているのであろう。

ところで、新華社の伝えるところによれば、北京大学のある副教授のブログに書き記された日記の内容が大きな反響を引き起こしたとのことである。その副教授は、自らのブログの中で、勤務先の北京大学から得ている月給の合計金額と毎月の支出の詳細とを、あたかも家計簿を記すかのように公表し、支出が収入を超えていること、「収入を増やす手だてを考えず、このままただ大学からもらう給料だけに頼っていたのであれば、とても生きていけない」と自らの窮状を訴えたのである。ちなみに、この副教授が北京大学から支給されている月給の合計金額は、4786元(1元=約13円)とのことである。

この副教授の自らの窮状に対する訴えに、世間はいかなる反応を示したか、といえ、彼に同情を示す意見はほとんどなく、逆に彼に対して手厳しい意見ばかりであったそうだ。世間一般の目には、5000元に近い月給というのは、普通の人の月給の数倍に当たり、それだけで十分に恵まれている、と映るのだ。5000元にもものぼる月給をもらっているながら、「どうやって生きていけばいいのか」などと訴えてみても、世間にはとうてい納得されるわけはなく、それこそ一般の人々は「どうやって生きていけばいいのか」と、かえって反発を招く結果となってしまったようである。

また、世間は大学教授という存在を、エリート中のエリートであるがゆえに、一般の人々の期待を一身に背負い、社会的責任を果たすべき存在、と見ているのである。それゆえ、自らの収入と支出とを公表し、憚ることなく自らの金銭問題を話題にする副教授の行為が、彼らの目には、社会的な責任よりも個人的な利害を優先する行為と映ったのであろう。この点も、副教授に手厳しい意見が殺到した大きな原因であろう、と記者は分析する。

さらに、記事によれば、副教授の家計における支出の半分近くが子供の教育費であるという。この点などは同情の余地がありそうにも思えるが、副教授に対する批判は、なおもやまない。大学の教員は、学生が納める高額な学費の受益者なのであり、その点を棚上げにして、自分の子供が通う中学や高校の学費や雑費が高いなどと不満を漏らしたところで、それは一面的な見方にすぎず、全く同情に値しない、というのである。

ブログ上で自らの窮状を訴えた副教授。ここまで波紋が広がるとは思ってもいなかったであろう。それにしても、大学教員に対する世間の目は、かくも厳しいものなのか。私自身、自らの給与明細を見ると、ついついこの副教授に同情したくなるのであるが、これ以上言うと、同じように袋叩きにされそうなので、もう何も言うまい。粛々と研究と教学に励み、自らの社会的責任を果たすこととしよう。(矢田博士)

## 韓 国

### 韓国の若者たちが用いる縮約語

アルクから出版されている『韓国語ジャーナル』18号(2006年10月9日発行)のNews & Topicsで、10代の若者が使っている縮約語として「486」というのが紹介されている。これは「사랑해(愛してる)」を意味するのだそう。どうして「486」が「愛してる」なのかといえば、「사랑해」の「사」が4画、「랑」が8画(実際には6画である

が)の線をすべて1画として数えている)、「해」が6画、これら画数を合わせると「486」になるからである。

このような数字による表現でまさきに思い浮かぶのは、ノ・ムヒョン政権の支持基盤となっている「386世代」である。これは、若者の表現ということではなく一般に広く用いられている。この「386世代」は1990年代に30歳代で、80年代に学生生活を送って民主化運動を経験した60年代生まれの世代を意味する。30歳の「3」、80年の「8」、60年の「6」を組み合わせたものである。「386世代」の「386」は、実際の数字を略したもので意味との連関が強いのに対して、「486」の場合、たんに文字の画数を示したにすぎず、意味との連関はきわめて希薄で、縮約語というよりも若者の符牒、あるいは暗号とも言うものである。

インターネットで調べれば、このような暗号に近い若者言葉はまだまだあり、たとえば、「124 1365 486 486」というのがある。この中の「486 486」は上記の「486」を繰り返したもので、「愛してる、愛してる」の意味である。その前の「124 1365」は韓国語と直接的な関係がなく、また「386世代」の「386」に類した発想からきているので、謎々を解く要領でその意味を考えてみていただきたい。解答はこの文章の末尾で。

上の数字はまだ解読可能かもしれないが、「1365527124012486」となるとお手上げである。最後の「486」はもちろん上記の「486」である。しかし、その前の数字の羅列は謎々を解く要領ではとうてい解読できない。この「1365527124012486」全体の意味は、なんと「1年365日、52週、1週間、毎日24時間永遠に愛してる」となるのだそうである。最初の「136552」が「1年365日、52週」であり、次の「7」が1週間(=7日)、それに続く「124」が「毎日(1日)24時間」の意味で、その後の「012」が「永遠に」を意味している。「012」がなぜ「永遠に」であるかといえば、「永遠に」を意味する韓国語「영원히」の「영」が「零」の韓国語読みと同じであることから「0」で、「원」が「元」や「源」の韓国語読みと同じであることが

ら、それら漢字語の意味を汲んで「1」で表したのである。さらに「2」は「영원히」の発音が「ヨンウォニ」となるので、「ニ」に含まれる「イ」が数字の「2 (이)」の発音と同じであることからきていると思われる。

もうひとつ、数字と記号、アルファベットを組み合わせたとてつもない例をあげておこう。それは、「!25=i=U」というものである。パスワードとして使えそうな文字列であるが、これは、「느낌이 오는 아이는 너뿐이다 (感じがする (ピンとくる) 子は君だけだ)」と読むのだという。感嘆符号「!」は韓国語で「느낌표」というので、「!」で「느낌 (感じ)」を表し、「2」は日本語の「が」に当たる助詞「이」が数字「2」の綴り・発音と同じであることから、「!2」で「느낌이 (感じが)」を意味させている。「5」は「오는」(動詞오다の現在連体形。なお오다の本来の意味は「来る」)の語幹「오」が数字「5」の綴り・発音と同じであることから、これを「5」で表し、現在連体形語尾「는」は、体言につく日本語の「は」にあたる助詞「는」と同じであることから、これを等号「=」で示して、「5=」で「오는 (来る、ここでは「する」)」を意味させている。「i=」の「i」はこのアルファベットの名称「アイ」が「아이 (子)」の発音と同じであることからきており、「=」は体言につく助詞「는 (は)」を表し、結局「i=」で「아이는 (子は)」を意味させている。さらに、「U」は言うまでもなく英語の“you”で、「너 (君)」を意味しているのである。かくして、「!25=i=U」で「느낌이 오는 아이는 너뿐이다 (感じがする 子は君だけだ)」となる。

さて、上で問題にしておいた「124 1365」の意味は解読されたであろうか。後続の文を読んでもらえば解けたのではないかと思うが、「1日24時間、1年365日」である。したがって、「124 1365 486 486」全体で「1日24時間、1年365日、愛してる、愛してる」となる。(田川光照)

#### 編集後記

初めて編集の仕事を経験しました。委員になった頃は、まだ秋らしさなど感じられない季節でしたが、原稿の締め切り日間近になると、原稿依頼、入稿確認、校正、紙面編集など作業が続き、あつという間に秋が深まっていきました。慣れない作業で、多々不手際もありましたが、皆様の温かいご支援で何とか無事発行にこぎつけました。みるみるうちに原稿が集まったときには、大感激でした。この場を借りて御礼申し上げます。

今号は、ロマンティックな古典の話から今時の元気なお爺さんまで、身近な辞書の使い方から遠い惑星の名の由来まで、大変バラエティに富んだ内容になっていますので、読者の皆様には楽しんでいただけたと思います。気に入ったらお友だちにも薦めてください。私もクリスマスにはできたの語研ニュースを配り歩きたいと思います。

これからも語研ニュースの発展にご協力ください。次回はもっと段取りよく作業にかかりますので、A先生、よろしく願いいたします。(U)